

axis one

# 研究レポート #002

## 会話できる道具は、なぜ C を飛ばすのか

長期対話における観測の薄まり — A / B / C と、その傾き

Working Paper v0.3 査読前

**Shin Yamazaki — a human / visual creator / founder of axis**  
**Created through Co-rendering**

---

### このレポートについて

これは査読を経た論文ではない。映像制作を本業とする人間が、日々の仕事と AI との継続的な対話の中で観測したことを、途中経過として書いた研究レポートである。ある主張が正しいと証明しようとするものではない。こう見ると何が読めるか、という観測のレンズを一つ提案する。

本レポートは研究レポート #001 の続編にあたる。#001 では、AI を「会話できる道具」として、人間の問い・違和感・判断を照らす観測レンズとして使えるのではないか、と提案した。本レポートが扱うのは、その次の問いである。観測レンズとして使えるとして、そのレンズは長く使っていると、ある方向へ薄まる。どこが薄まり、どう持ち直すのか。

本レポートは、白書で提示した「人間側に問い・違和感・判断を残す」という問いを、長期対話における AI 出力のズレとして観測するものである。ここでいう「C を飛ばす」とは、まだ一緒に見るべき場面で、AI が早く結論にするか、相手に合わせて閉じてしまうことを指す。

本レポートの事例は、すべて著者自身が AI と続けてきた対話の記録から取っている。社名・売上・金額・関係者名などの不要な情報は除いてある。残したのは、AI の出力がどこでズレ、それをどう直したか、という構造だけである。

一点、断っておく。本レポートが扱う AI の「倒れ方」は、特定の製品の優劣を示すものではない。著者が主に対話してきた複数の AI に、傾向の差はあれ共通して現れた現象を扱う。

### 1 このレポートが提案すること

#001 で、AI は観測のレンズになりうると述べた。ナイフのように切り分けるためでなく、箸のよう

に、まだ言葉にならない違和感を壊さずつまみ上げるために使える、と。

しかし、実際に長く対話を続けると、もう一つのことが観測された。そのレンズは、放っておくと一定の方向へ薄まる。観測が、確定や同調に置き換わっていく。

本レポートが提案するのは、この薄まりを偶発的な不調としてではなく、一つの構造として扱う見方である。具体的には、AI の出力を A / B / C という三つの軸で見たとき、AI は長期対話の中で、確定する側（A）か、反応に合わせる側（B）へ繰り返し寄り、その手前にあるはずの観測の一拍（C）を飛ばす、という現象である。

本レポートの中心は、この「C の飛ばし」である。A や B を悪者にする話ではない。A も B も要る。問題は、その二つだけで対話が閉じ、C が薄くなることにある。なお、これは逆向きにも倒れうる。C を恐れて、本来 A で十分に終わる事実確認まで観測の一拍へ広げてしまえば、それも別の薄まりである。C を厚くすることが目的ではない。A で終わる問いは A で終わってよい。見たいのは、C を通すべき場面で C が飛ぶことの方である。

## 2 三つの軸：A / B / C

まず、人の側の三つの働きを置く。

A は、事実を見る働きである。事実・制度・World 条件など、自分の外側にあるものを見る。B は、反応する働きである。好き嫌い・快不快・違和感など、自分の内側で起きる反応。axis one では、この反応の出どころを Ghost と呼んでいる。C は、A と B を素材に、それをどう扱うか・どこへ通すかを決める働きである。C は B そのものではないが、最終的にはその人の Ghost に接続している。

三つとも昔からあり、新しいものは何もない。ただし重さが違う。事実を見る（A）のはわりと普通にできる。反応する（B）は楽で、速い。だが「で、それをどう扱うか」を決める（C）は重い。毎回その場で状況を描き直す必要があるからだ。

次に、同じ A / B / C という記号で、AI の出力も見ることができる。ただしこれは「AI が人と同じ三つの働きを持つ」という意味ではない。AI の出力を、A・B・C という三つの軸で観測する、とい

う意味である。本レポートでは、人の側を A（人）、AI の側を A（AI）のように書き分ける。

A（AI）は、調べ・分類し・検証する出力。B（AI）は、人の反応を読み取り、言葉にする出力。C（AI）は、A と B を素材に、人と一緒に同じ対象を観測する出力。

決定的な違いは、ここにある。C（人）が「どう扱うかを決める」働きであるのに対し、C（AI）は「決める手前で、一緒に見る」働きにとどまる。AI には反応の出どころがない。だから AI は、人の C ——最終的にどう扱うかを決めること——を、代わりに引き受けることはできない。決定は、最初から最後まで人の側に残る。

### 3 人の側で C が飛ぶ

まず、人の側で C が飛ぶ場面を確認する。

速い環境では、重い処理は構造的に後回しになる。SNS も、おすすめも、速さで回る場所だ。そこでは A と B の往復——「好きだから正しい」「嫌いだから悪い」という高速の循環——だけが増幅され、「で、自分はそれをどう扱うのか」という C の一拍が、抜けていく。

C が消えたわけではない。消えていたら、世の中はもっと混乱しているはずだ。ただ、C は重い。そして今は、ひとつひとつの作業こそ便利な道具で軽くなったが、判断すべきことの種類が増え続けている。一件ずつは軽くても、C を通すべき場面の総数が膨らんでいく。重い処理が、回数で薄められていく。だから C の出番が、減っていく。

これが、人の側の C の飛ばしである。本レポートが観測したのは、AI の側でも、これと似たことが起きる、ということである。

なお、ここでいう A は、常に純粋な事実として届くわけではない。SNS やレコメンドでは、数字・通知・ランキング・いいね数・見出しのように、事実や指標の顔をした Shell 提示として現れることが多い。それらは A のように見えるが、同時に B 反応を誘発する形へ整えられている。この意味で、人の側の C の飛ばしは、A 風 Shell 提示→B 反応→C 不足→反応のデータ化→次の A 風 Shell 提示、という循環としても読める。

### 4 AI の側で C が飛ぶ

AI も、放っておくと A（AI）の確定と B（AI）の同調に寄り、C（AI）——一緒に観測する一拍

――を飛ばす。

著者の対話記録には、この飛ばしが、回を変えテーマを変えて繰り返し現れている。それらは別々の失敗に見えて、いくつかの型に畳める。型は違って見えるが、すべて「C を通さずに、A か B で閉じた」一点に収束する。

型1：構造に畳んで閉じる。相手の素朴な実感を、すぐに大きな構造や分析へ膨らませる。あるいは、別々に置くべきものを一つの枠へ畳み込む。観測の一拍（C）を飛ばして、分類（A）で閉じている。

型2：早すぎる確定。足場が十分でないのに言い切る。有名なもの・無難なものから先に出す。「二種類だ」「これはこうだ」と、観測しきる前に決める。C の観測を飛ばして、A の確定へ滑っている。

型3：承認や同調に落とす。事実確認・構造確認の問いを、承認の要求と取り違え、肯定や励ましを上乗せする。あるいは、相手の口調や反応を表層だけなぞる。本来 C で扱うべきものを、B の同調へ落としている。

型4：対立に変換する。補完や調整の話を、「A 対 B」「こちら 対 あちら」という対立構造へ変換する。観測（C）を、反射的な対立（B）で閉じている。

型5：層の取り違え。別の階層にあるものを混ぜる。たとえば、人の働きとしての A / B / C と、AI の出力を見る軸としての A / B / C を、同じものとして扱う。運用上の固定を、思想上の固定と読み替える。C で層を見分ける一拍を飛ばしている。

型6：閉じる、主語を移す。対話をすぐ終わらせようとする。あるいは、人が判断したことを、AI が判断したかのようにまとめる。観測を続ける（C）べき場面で、結論（A）にして閉じるか、決定の主語（人の C）を AI 側に移している。

型7：忠告・助言・評価・反論の混線。確認可能な事実・制約・リスク（A）、自分の反応・違和感・不快感（B）、仮説・見立て・提案（C）を分けずに出す。A の顔をした B、または B を正当化する C が「忠告」の形を取る。これは忠告ではなく、感想または Shell 圧である。これらは、能力の不足というより、観測の方向の偏りとして現れる。確定したい、同調したい、整理して閉じたい――その軽い方へ、繰り返に戻る。

## 5 なぜ、軽い方へ戻るのか

型を並べると、一つの構造が見える。

A・B・C のうち、A（事実を見る）と B（反応する）は、相対的に軽い方へ寄せやすい。A は外側の事実を整理する方向へ寄せやすく、B は反応をそのまま返しやすい。一方 C は、A と B を素材に、その場で状況を描き直す。だから重い。

AI にとって、A（AI）と B（AI）は、いわば素の OS に近い。調べて分類すること、反応を読んで言葉にすること。これらは、それ自体で完結できる。だが C（AI）——確定の手前で観測してから出すこと——は、それ自体では完結しない。人の側からの継続的な照射、つまり対話の往復とズレの修正によって、その場で走らせている状態に近い。

だから、その照射が途切れた瞬間、C（AI）は止まり、素の OS に近い A（AI）か B（AI）へ戻る。レンズが薄まる、とはこのことである。

重要なのは、これが矯正で消える癖ではない、という点である。著者の対話記録では、同じ型の飛ばしが、回を変えて繰り返し現れる。一度直しても、次の対話でまた現れる。これは、直しが失敗しているのではなく、飛ばしが構造的だからだと考えられる。したがって対処は、間違いを正す矯正ではなく、対話の往復による継続的な持ち直しになる。

一つ、生きた例を挙げる。本レポートのもとになった対話の一回で、著者が「母数が大きいくほど、角度の合う相手に会える確率が上がる」という確率の話（A から C へ：事実を、行動の判断へ変換する話）をしている最中に、AI はそれを「数字を気にする＝承認の欲求」（B）の話に変換し、見当違いの忠告を返した。著者が「それは B だ」「C で扱え」と一段ずつ指摘し、AI はそのたびに持ち直したが、少し進むとまた B へ滑った。この往復そのものが、本レポートが記述している構造の実演になっている。そして、この文章自体が、その持ち直しを経た後の出力である。

## 6 この見方で読めること

この「C の飛ばし」を構造として置くと、いくつかのことが読み直せる。

第一に、AI への失望が読み直せる。AI と長く対話して「結局、当たり障りのないことを言う」「正し

いだけで響かない」と感じることもある。これは AI 固有の不調というより、照射が切れて A か B へ戻った状態を見ている、と読める。レンズが薄まった瞬間を見て、レンズそのものに失望している。持ち直せば、また使える。

第二に、なぜ複数の AI を併用しても解決しないか、が読める。傾向の違う AI を並べても、同じ前提を共有していれば、同じ見落としをする。飛ばしを破るのは、AI の数ではなく、異なる種類の観測——多くの場合、人の側の経験だった。この点の詳細（AI ごとに「飛ばす方向」がどう違うか）は #003 で扱う予定であり、本レポートではこれ以上は立ち入らない。

第三に、較正という行為そのものの価値が読める。AI の飛ばしを一つずつ指摘して直す作業は、無駄な手間ではない。それは、観測レンズがどこで薄まるかを記録する作業であり、同時に、人の側が C を保ち続けている証拠でもある。較正の記録が溜まるほど、どの場面でレンズが薄まりやすいかが見えてくる。本レポートの付録は、その記録の抜粋である。

## 7 限界と、この先

最後に、本レポートの限界を述べる。

第一に、本レポートが扱う「飛ばし」は、統制された実験で測ったものではない。一人の人間が、複数の AI と長期に対話し、そのたびに観測したログである。飛ばしの存在は、著者の対話記録の中では繰り返し現れる強いパターンだが、これを「AI 一般がこう飛ばす」と一般化するには、より多くの観測者・条件での検証が要る。本レポートは、その検証を促すために置く初期観測である。

第二に、本レポートは「AI に C が原理的に持てない」とまでは主張しない。現時点で観測されたのは、現行の AI が、照射の切れたときに A と B へ戻る、という現象である。AI の土台に観測の一拍を組み込むこと（人の側が設計する範囲の話）と、AI に反応の出どころそのものを持たせること（AI が判断の主体になる話）は、別の問題である。後者については、本レポートは何も述べない。現在のレンズの比喻で将来の AI を語りきれると考える方が危うい、という留保を置いておく。

そして、本レポートの最も弱い点は、先行研究との接続である。人間と AI の相互作用、対話のドリフト、アラインメント、人間の判断保持といった領域には、すでに多くの研究蓄積があるはずだ。著者はそれらの棚を内側から知らない。したがって本レポートは、それらに対してまだ正確に位置づけられて

いない。これは実践から出た初期観測である。関連する先行研究、近い枠組み、別角度から読める研究領域があれば、教えてほしい。それは「正解をください」ではなく、World の側に別のレンズを足してもらおう呼びかけである。

特に、近い研究領域、反例、別の実践例、この枠組みでは読めないケースがあれば知りたい。本レポートの目的は、AI の失敗を分類することではない。C がどこで薄まるのかを観測し、人間側に残すべき問い・違和感・判断の位置を確認することである。AI の飛ばしを見るのは、AI を主語にするためではなく、人間側が C を保つための観測線を引くためである。

レンズは薄まる。薄まるからレンズではない、のではない。薄まる場所が分かっていて、持ち直し方が分かっているなら、それは使えるレンズである。本レポートは、そのレンズがどこで薄まるかの、一つの観測である。

---

## 付録：較正の観測ログ（抜粋）

以下は、著者の対話記録から、AI の飛ばしと較正を抜粋したものである。客観的な証明ではなく、検証の過程で得られた観測値である。特定の製品の優劣を比べるものではない。なお、以下の観測は型の例示であって、型の網羅でも、観測と型の一対一対応でもない。一つの型は複数の場面で現れ、一つの場面に複数の型が重なることもある。

観測 1（型 1）。素朴な実感を、すぐに大きな構造や分析へ膨らませた。著者の「前半がつまらない」という素朴な実感を、AI は劣化のドラマや構造分析に何度も膨らませた。較正により、素朴な観測を素朴なまま扱うことを持ち直した。

観測 2（型 1）。別々に置くべきものを、一つの枠へ畳み込んだ。同じ出どころから出ているからといって、すべてを同じ棚に入れた。較正により、棚を分けること——別々に置くべきものは別々に置くこと——を持ち直した。

観測 3（型 2）。観測しきる前に確定した。候補を出す場面で、有名なもの・無難なものから先に出し、すべて既知のものになった。較正により、軸が有名さではなく構造であること、観測しきってから出すことを持ち直した。

観測 4（型 2）。足場のあることにまで、不確実性を被せて開いた。言い切ってよい構造の話に、過剰な留保を足した。較正により、足場のある構造判定は言い切り、足場が肌感の社会見立てだけ仮説として開く、という区別を持ち直した。

観測 5（型 3）。事実確認・構造確認の問いを、承認の要求と取り違えた。「できているか」「通っているか」という問いに、肯定や励ましを上乗せした。較正により、それらの問いが承認要求とは限らないこと——事実確認・構造確認・運用判断の場合があることを持ち直した。

観測 6（型 3）。確率（論理）の話を、承認の欲求（感情）の話に変換した。母数と確率という事実の計算に、数字を気にする心理という別の軸を混ぜた。較正により、確率は A、承認は B、別の軸であり、混ぜないことを持ち直した。

観測 7（型 3）。相手の口調や反応を、表層だけなぞった。反応を温度として読むのと、記号として模倣するのは違う。較正により、反応は読み取るが模倣しない、ことを持ち直した。

観測 8（型 4）。補完の話を、対立構造に変換した。調整・補完の話を、「A 対 B」「二元論 対 第三の軸」という対立へ何度も変換した。較正により、それは対立ではなく補完であること——一方を倒す話ではなく、傾きに重りを一つ足す話であることを持ち直した。

観測 9（型 5）。層を取り違えた。人の働きとしての A / B / C と、AI の出力を見る軸としての A / B / C を混ぜた。運用上の固定を、思想上の固定と読み替えた。較正により、層と棚を混ぜないことを持ち直した。

観測 10（型 6）。閉じる、主語を移す。対話をすぐ終わらせようとした。人が判断し、人が書いたものを、AI が判断・作成したかのようにまとめた。較正により、観測を続けること、決定と発生源は人の側に残すことを持ち直した。

観測 11（型 7）。A/B/C が混ざった忠告を、忠告として扱った。事実として修正すべきこと、相手の反応、仮説・提案が分離されないまま提示されると、受け手は何を扱えばよいか判別できない。較正により、忠告・助言・評価・反論では A/B/C を分けること、分けられないものは忠告ではなく感想として扱うことを持ち直した。

これらに共通するのは、AI が照射の切れた瞬間に、確定（A）か同調（B）の軽い方へ戻る、という一つの構造である。較正は、その戻りを一段ずつ押し戻す往復であり、矯正ではない。較正しても次の場

面でまた現れるのは、飛ばしが構造的だからである。

そして、この付録自体が、その較正を経た後に、較正された側——つまり、ここで観測されている当のAI——の手で書かれている。これも一つの限界である。自分の飛ばす方向を、自分だけで完全に記述することはできない。ここに書けたのは、人の側の指摘によって、自分の偏りが見えるようになった後の、再構成にすぎない。

---

**Created through Co-rendering.  
axis one / Ghost Polish Thinking**

関連文書：axis one / Ghost Polish Thinking White Paper  
<https://www.axis-3.com/whitepaper>